

『インドといえば仏教、仏教といえばインド』のはずなのだが、インドの宗教は 83%がヒンドゥー教。仏教なんて、イスラム教とキリスト教にも抜かれてたったの 0.7%である。

13 世紀初頭にイスラム教徒の攻撃を受け、仏教はヒマラヤを越えてチベットへ逃れる。大切に守り伝えてきた教えや戒律の全てをチベットの僧侶に託したのだ。

そういう経緯があって、チベット仏教は、インド仏教の本流をそのまま継承すべく運命づけられたのである。やがて本家のインド仏教は衰退へ向かう。

そして今、チベット人によって、亡命というかたちで仏教が戻ってくるってのは、何て皮肉な巡り合わせなんだろうか。

チベットの僧侶たち

ただ、当時のインド僧たちが、もし今のチベット僧を見るすると恐らく仰天するに違いない。

これはインドとチベットの違いというよりは、時代の違いによるものであるが、現代に生きる私でさえも僧侶たちの暮らしを垣間見てびっくりしてしまっている。

なんかこう、勝手に作り上げたイメージなのだが、標高 1800 メートルの険しい山にこもって修行し、禁欲的な生活をおくっていると思っていたのだが、どおーもそうでもないような気がする。もちろん 24 時間一緒にいて観察している訳ではないし、ほとんどの修行はお寺にこもっている時だろうから目にしていない。むしろ彼らがつかの間の自由時間にくつろいでいる時に見かける事が多いだろうから、違和感を持ってしまうのかもしれない。

世俗的な日本の僧侶と違い、チベットの僧侶は質素な生活をおくりながら、厳しい修行に励んでいるんだろうなあーなどと思いながら街を歩いていると、カフェでくつろぐ僧侶達に出くわした。

チャイは一杯 5 ルピー(9 円)だから、決して贅沢ではないのだけど、なんかこうその姿が優雅なんだな。

そして、履いているのは草履ではなく革靴だったりする。

腕には派手な金色の時計が光っている。

電子音が響いたと思ったら懐から携帯を取り出し、楽しそうに話し始めた。

またネットカフェでは流暢にキーボードを叩く姿も。

そしてそして、さすがに手をつないではいなかったものの、若い女性と並んで歩くチベット僧も。まあ確かに日本でも、袈裟こそ着てはいないが坊主も居酒屋に行って酒を飲むだろうし、合コンにも行く。そう考えると、それほど驚くに値しないのかもしれないが、どうもあの袈裟との違和感があるんだな。



カフェでくつろぐチベット僧。このダラムサラにはチベット僧がたくさんいて、お茶したりネットしたり。何かごく普通なんだな。

ここダラムサラは、治安がいい事で知られている。殺生、窃盗、不和、邪念、陰謀、貪欲を厳し

く戒めている多くのチベット人がいるからかもしれない。

ただ噂では、袈裟を着た偽物の僧侶がいるそうだ。過去にはロシア人、イスラエル人などが、エンジの袈裟に身を包み、『日本語(もしくは韓国語)を勉強中なので、私の家で教えてくれないか』などと言って近づいてきた事件があるらしい。ロンリープラネットでも、ここはレイプが多いと Warning を出している。

確かにチベット人以外でも、修行している外国人が多い。背の高い青い目をした僧侶や、ブロンドの髪をバツサリ切ったと思われる女性の僧侶もいる。だから外国人が袈裟を着ていても怪しまないのだが、外国で、知り合ったばかりの男性の家についていってしまうというのは、袈裟のマジックなんだろう。

ダラムサラの店

インドは、中国と並んでぼったくりがすごい。

普通の国では、相場の 1.5~2 倍くらいからスタートするのだが、インドでは平気で 3~4 倍くらいからスタートし、2 倍くらいで売っばらってしまおうとする。しかもインドの場合、ぼったくりの店は土産物屋だけではないのでたちが悪い。

試しに商店でキッコーマンの値段を聞いてみると、偉そうなインド人のオヤジが 330 ルピー(805 円)と言う。世界で一番高い。5 分くらい粘って粘って結局 300 ルピー(732 円)。もうそれ以下では一切売らないし、まだ交渉するなら帰ってくれと怒ったように言う。しかしそれが手口なのだ。すぐ前の別の店では同じ物が、いきなり 200 ルピー(488 円)からスタートするにもかかわらずである(実はそれさえもぼったくりなのだけだ)。

一方、実に実に対照的なのだが、同じダラムサラに住むチベット人達はぼったくりを全くしない。旅行者向けの商品なんだから、多少は高くても当たり前だし、そもそも彼らは避難民なんだから、生活も楽ではないはず。

しかし不思議な事にぼったくり一切なしの定価販売。しかも路上で売っているの餃子とか、編み物なんかは、材料費を考えると『いいのかなあ』とこちらが心配するくらい安いのだ。

チベット人とインド人、実に対照的なのである。

そうそうこんなことがあった。

土産物屋でパシュミナのショールが売られてい

る。どうやらパキスタンのフンザで買ったものと全く同じ物。パキスタンではかなり粘って安く買った積もりだけど、それでもぼられているかもしれないと思い、店員と交渉してみると、パキスタンの 3 倍の値段から一歩もひかない。店員は 15 歳ぐらいのインド青年。

あまりに高いし、例によってインド人らしい大上段な対応である。

もともと値段のチェックだけで、もうショールを買う積もりがないので、そんな店はさっさと出ればいいのだが、物の言い方もしぐさも、あまりに腹立たしい小生意気な青年だった。



道路で編み物をしながら、できた靴下を売っているチベット難民のおばあちゃん。

『この餓鬼、へこましたらなあかん』と何故か大阪弁が出る私。徹底的に対決する事に。試しにショールの横においてある革の小物入れを幾らか聞くと、誇らしげに『80ルピーだけど、特別に50ルピーでいいよ、あんただけだよ』だと言う。

しかし私は、馴染みの土産物屋から、全く同じ小物入れを25ルピーで買っていたのだった。

『ほらな、この店はぼったりだろ。この小物入れはな、仕入れ値が22ルピー。だから普通の店では35ルピーで売っているし、良心的な店では25ルピーで買えるんだよ。この店だけ高い。あまりがめつくなよ』

と言うと、

『そんな馬鹿な事はない。仕入れ値は40ルピーなんだ。嘘をついてるのはあんただよ』と返す餓鬼。

そんなやり取りを続けていたところ、ついに彼が、

『25ルピーで買えるなら、俺が何十個でも30ルピーで買ってやらあ』と言ってきた。

にやっと笑う私。

早速、馴染みの土産物屋から20個の革の小物入れを借りてきて、その餓鬼の目の前に突き出し、

『さあ、30ルピーで買ってもらおう。その金を元に今度は100個持ってきてやるよ』と言うと、案の定困った顔をして、最後に泣きそうになって『ゴメン』と。

よく聞いてみると、彼はイスラム教徒だという。もともとカシミール紛争のきっかけは、この地域がイスラム教徒が多く住む場所にもかかわらず当時この地域を納めていた長が勝手にインドに入る事を表明してしまった事にある。だから北インドにはイスラム教徒が多いのだけど、同じイスラム教徒のパキスタン商人とはえらい違いだ。インドにいると商売のやり方までこうも意地汚くなるのかと不思議に思う一方、またパキスタンが好きになるのだった。



仲良くなった馴染みのお土産屋さん。彼の家でカレーをご馳走になった。友人と二人暮らし。家賃1000ルピー(2,439円)。

インド vs パキスタン

インドといえばカレー、カレーといえばインド、のはずなのだが、そのカレー、実はパキスタンの方が美味しい。

2つ理由がある気がする。

1つはマサラの配合。何をどう混ぜているのか分からないがとにかく違うのだ。インドのカレーは何だかもの足りない。パキスタンのカレーの味は日本のカレーに似ている。

両方がイギリスの植民地の“インド”だったときには恐らく似たような配合だっただろうから、人の気質もそうだけど、60年経ってなぜか違いが広がったのか不思議だ。

もう1つは、肉を使っているかどうか。パキスタンではさすがにポークカレーはないけれど、マトンもチキンもビーフカレーもある。一方インドでは、大都市や、イスラム教徒やシーク教徒の

多い地域を除くと、カレーはほとんどがベジである。何種類もあるけど豆のカレーが中心。肉のエキスって大事だなあと実感できる。

インドのカレーは一食目二食目ぐらいいいんだけど、段々飽きてくるのだった。

カレーは圧倒的にパキスタンの勝ち。

そして実はチャイも、パキスタンの方が美味しい。

理由はよく分からない。パキスタンの方が、ミルクが濃い気がする。それでいてしつこくない。

インドにはスペシャルチャイと呼ぶミルクティがある。水を一切使わず、ミルクだけで作るロイヤルミルクティの事らしい。それでも水を足すパキスタンのミルクティに負けているのだ。なんだろう。

チャパティ(主食のパン)もパキスタンの方が美味しい。パキスタンもインドも、ある時はふかふかだったり、薄皮だったりするけど、あっこれ美味しいと思うのはパキスタンの方が多い。

パキスタンもインドも、全土を回った訳ではないし、食べた回数は限られているのでかなり偏った意見とも思っていたけど、両国を回った日本の旅行者は多くの方が同じ事を言うのでやはりそうなんだと思う。

ただ、インドにはビールがあるのだった。カレー、チャイ、チャパティのハンディをかなり補うものがある。

日本のビールに比べたらまだまだだが、西から、つまりイランとパキスタンからインドにたどり着くと、本当に美味しい。インドの物価を考えるとだいぶ高い点が残念ではある。

ここダラムサラでは酒屋で買ってもレストランで飲んでも 80~100 ルピー(195~244)。ただ 1800 メートルと標高が高いので、ビールがとてもよく回るのだった。

インド映画

世界で最も多くの映画を製作している国はインドで、どんな街に行っても映画館がある、と聞いていたが、まさかこのダラムサラには無いだろうと思っていた。それほど小さな街なのだ。でも 3 つもあった。

映画は DVD をプロジェクターで上映するというもので、20 畳くらいの部屋の床を段々に改造し、30 ぐらゐのイスが並んでいる。スクリーンの幅は 3 メートル程度という小さな劇場だ。入場料は 50 ルピー(122 円)。インドにしてはだいぶ高いらしい。ただ安いところは、スクリーンが無くてテレビが置いてあるところもあるらしい。

見た映画はガンジー。

ガンジーってのは偉かったんだなあ。以前一度



街にあった小さな映画館。スクリーンの幅は2メートル。座席数は30あまり。DVDを映す方式。

見たことがあるのだけれど、インドで見るガンジーはすばらしかった。

イギリス軍が400人近くを殺したというアムリトサルの大虐殺シーンは、先日行ってきただけに衝撃的。

一緒にガンジーを見た観客の中には白人もいた。インドにはイギリス人が多いのだが、ああいうシーンをインドで、インド人と一緒に見たイギリス人は何をどう感じるのか興味があるところだ。

インド映画も見た。映画のタイトルは Kal Ho Naa Ho. 何でも日本でのタイトルは、『明日が来なくても』という意味らしい。去年インドで爆発的にヒットした映画だという。

なかなか面白い。ストーリーはともかく、上手く説明できないが日本映画やハリウッドではありえないようなカットの仕方、フィルムの回し方をされていて、もの珍しい。

マッサージ

ここダラムサラには、外国人を当て込んだたくさんの教室がある。

白人受けするのか、ヨガ、瞑想、座禅、魂の開放・精神世界などの”psych なんとか”ってのが多い。その他にはチベット料理、インド料理、マッサージなど。

マッサージ教室は、チベットマッサージ、インドマッサージ、タイマッサージ、指圧と4種類もあった。1日2時間程度、1~3週間に亘るレッスンだ。

その内の1つに行き、レッスンより、マッサージをしてくれないかとお願すると、オフシーズンだから暇だったのか、1時間150ルピー(371円)で受けてくれた。

このマッサージの師匠は、ビルの1室を借りて、一人で営業している。英語も堪能。

私はここダラムサラにかなり長居し、毎日通ったので、もうかなり仲良しになっていた。以下は雑談での話。

(1) カーストについて

彼は、カーストの低い方の身分だと明かす。だから自分の父親は、カーストに関係のないアーミーに入ったという。インドでは憲法で“身分に上下無し”と謳っているそうだけど、現実にはがっちりとした身分差別がある。ただアーミーだけは、あまり身分が関係ないらしい。『シーク教徒は身分差別が無いんでしょ。だからヒन्दゥー教徒から逃れるようにして、シーク教徒になるって聞いたけど』と聞くと、

『そりゃ違う。シーク教徒の理想はそうなんだけど、現実としてはばっちり差別がある。インドでは名前で身分がわかっちゃうからね。本人がシーク教徒になっても、その名前でヒन्दゥー時代の身分がわかっちゃうから、結局はヒन्दゥー教徒が差別をするんだ。だから結局何も変わらない』と。

彼は、熱心なヒन्दゥー教だが、カースト自体は否定している。ニュージェネレーションに



掲示板に張られたいろいろなレッスンのピラ。料理あり、マッサージあり、ヨガあり。

なったら、何のしがらみがあるかと。

『カーストは職業と密接なつながりがあるんだ。大工になれるカーストの出身は一生大工だ。クリーニングのカーストは一生クリーニング。そしてその息子も同じ。ではコンピューターや IT 技術従事者の様な新しい職業の扱いは一体どうなるんだ。新しい時代には新しい考え方があってしかるべきで、古いしきたりのカーストは、急速に多様化する現代ではもはや意味がない』というのが彼の意見。

しかしそれでも『ヒन्दゥーを信仰することとは全く別物』だ、とも言う。その辺りが分かるようで分からないような……。

そんなリベラルな彼だが、妻は同じカーストで、父親同士が決めた結婚だと言う。

(2) 恋愛について

妻とは結婚式の当日に初めて会ったと言う。同じ村出身なら、式まで会った事があるのでは？ 写真ぐらいは見たでしょう？ と聞いたが、全く無いという。

そしてほとんどのインド人がこうやって結婚するそうだ。インドでは結婚する前の男女がデートすることは、たいへんなスキャンダルになるらしい。

都市部では最近、恋愛結婚あるものの、まだまだ一般的ではなく、田舎においては有り得ないほどらしい。学校は男女共学のところもあるにはあるが、それでも例えば放課後に男女が1対1で仲良く話をすることはまずないらしい。

彼には8才になる女の子がいる。

『もし彼女が15歳ぐらいになって、男の子とデートしたいと言ったら父親としてどうする』と聞くと、『no way 有り得ない』と言う。

結婚するまでは絶対許さない。結婚したら、もう夫とどこへ行っても良いが、結婚するまでは駄目だという。

そう言った後、『でも、自分の娘はそんな事言わない、絶対に。自分はきちんと教育しているつもりだ。自分は娘に尊敬されている。そんな娘が、そんなふしだらなことを言うはずがない』と断言した。

外国人を相手にする商売をしている関係もあり、アメリカやイギリスの映画を見る機会は割と多いらしい。だからアメリカンライフというものを彼は知っている。そんな風に、気軽にデートしたり、気ままな生活を送ったりすることにあこがれないのか、と聞くと、実にあこがれるという。自由が一番だと。現に、彼は結婚はしなくなかったと言う。もっと自由に生活がしたかったと。

しかし、経済的な裏づけがあればそれで良いが、そうでない限りはインドの今のやり方が良いと思っている。自由と責任。そして自由は経済的な裏付けの上に成り立つと断言する。もしやがてインドが豊かになった時は、今の様な家や血縁のつながりは薄くなるだろうと。現に裕福になった人たちの中には、ヒन्दゥーでありながら、しがらみに囚われずかなり自由に過ごしているそうだ。

『しかし今の自分はそうではない。既に37歳になった私でさえも、何か問題を起せば、それは父親の恥となるし、経済的にも完全には独立しているとは言えないという。これは仕

事を変えて裕福にでもならない限り、恐らく一生つづくだろう』と。それだけ父親や親戚とのつながりはかなり強いらしい。

現状ではアメリカンウェイなんて、遠い国の出来事だと割り切っている。

彼の友人で、イスラムの女性を愛してしまった人がいるらしい。ヒンドゥーとイスラムでは当然両方の親戚中が大反対したそうで、もう12年も一緒に暮らしているが、未だに双方の親から結婚の許しをもらえずに、結婚が出来ないという。同じ村にモスリムの家族がいる場合、ちょっとしたいざこざが起こることもあるそうだ。都市部ではあまりないが田舎では結構あると。

(3) 乞食について

シーク教の聖地アムリトサルでは全く見なかったのだが、ここダラムサラにはたくさんの乞食がいる。たぶんアムリトサルでは黄金寺院に行けば無料で食べられるからではないかと思うのだけど、一方ここダラムサラには、観光地で外国人が多い為か、やたらと乞食がいる。もちろんそれはインド人で、チベット人の物乞いは一人もいない。

マッサージの師匠に聞いたかったのは、インド人も『インド人は、乞食に対し施しをするのか』という点。

彼の回答はこうだった。

『それはいろいろ。全く無視する人もいるし、自分のように基準を設けてあげる人もいるし、その時の気分であげる人もいる』。

そして彼の基準とは、

『乞食には3種類いる。体に障害がある乞食。子供を抱いた乞食。単なる乞食。自分があげるのは、体に障害がある乞食だけ』
どうも子供を抱いた乞食と単なる乞食の中には、物乞いを『ビジネス』としてやっている輩がいるらしい。そういう連中は、観光シーズンが終わると、次の場所へ移動を開始するのだそうだ。

ダラムサラも既に寒くなり、どんどんと物乞いがどこかへ移っていき、大分少なくなって来ているそうだ。



オバチャンの乞食。よく見ると結構可愛い顔をしている。健康そうだから働きやすいのに、などと思うんだけど...

確かに北インドってもう寒い。温泉が恋しくなるのだった。

つづく